大正四年六月二十一日第三種郵便物認可（毎月一回發行）
經濟論叢　第四十四卷　第五號

神戸博士還曆祝賀記念論文集

京都帝國大學經濟學會

昭和十二年五月一日發行

經濟論叢

第四十四卷　第五號

（通卷第二百六十三號。禁轉載）

奉呈

神戸正雄先生

執筆者一同

目次

滿洲移民の特異性と歸鄕問題……法學博士　山本美越乃　一
農家の負債と負擔能力……法學博士　河田嗣郎　一〇
現代社會學に於けるパレト社會學の地位……文學博士　米田庄太郎　三三
幕末の商稅論……經濟學博士　本庄榮治郎　三三
實際政策と政策原則……經濟學博士　作田莊一　六六
『維新の詔』に於ける變革の國是……經濟學博士　石川興二　九九
シュレーデルの王室金庫論……經濟學士　小山田小七　九七
アダム・スミスに於ける自由主義社會の理念的構造に就いて……經濟學士　中川與之助　一二
工場內勞働者教育事業の目的……經濟學士　大塚一朗　一二九
アフタリヨンの貨幣心理說に就いて……經濟學士　松岡孝兒　一四八
明治初年の官營產業に就いて……經濟學士　堀江保藏　一六四
財政學の基本問題……經濟學士　大谷政敬　一八三
取引所實物化論と短期淸算取引の應用に就いて……經濟學士　今西庄次郎　二〇一
貨幣の中立性に關する一考察……經濟學士　中谷實　二一八
リストの國民生產力說……經濟學士　白杉庄一郎　二三四
財政學と經濟政策論との交流……經濟學士　島恭彥　二五〇

生產の構造と貿易……經濟學士　松井清　二六九
租稅の農業に及ぼす影響……經濟學士　山岡亮一　二八六
再保險と共同保險との接近……經濟學士　佐波宣平　三〇三
耕地管理組合に就いて……經濟學博士　八木芳之助　三二五
熊澤蕃山研究序說……經濟學博士　黑正巖　三三六
水產經濟學と其の課題……經濟學博士　蜷川虎三　三五一
輸入制限と國內物價との關係……經濟學博士　谷口吉彥　三六三
昭和の稅制改革……經濟學博士　汐見三郎　三八五
自然利子論……文學博士　高田保馬　四〇七
財政學者の鐵道經濟に關する研究論著に就いて……商學士　武藤長藏　四二四
現段階に於ける租稅體系……經濟學博士　土方成美　四五七
支那南北辨……法學博士　財部靜治　四九七
赤字公債の消化……經濟學博士　小島昌太郎　五二三

神戸正雄博士年譜及著書論文目錄

熊澤蕃山研究序說

黑正巖

私は熊澤蕃山がその得意の政治經濟論を實行せんとした舊岡山藩の生れであり、多年岡山藩の經濟史的研究に從事した關係上、夙に蕃山の學風并に事蹟を檢討し、その非凡なる人格に敬服する所頗る深きものがある。岡山藩の經濟史の研究には勿論、德川時代の政治經濟思想を理解する爲めには必ず蕃山を知らねばならぬ。而して蕃山に關する研究は少くないが、その見解は必しも私のそれと一致するものではないので、蕃山の全貌を系統的に研究しまとめ上げ度いと念願し、時にふれ折にふれ、蕃山の論著中より特徵ある所論を書き拔き、又見聞せる事蹟を書きつけてゐたのであるが、年を經て相當の分量に上つたので、昨今之を整理して一書をものせんと試みて居る。本稿はその一部ともいふべき序論である。從て未だ論文の體を成さずと雖も、恩師神戸正雄先生の還曆記念論文集公刊の企てあるを聞き、聊か祝意を表するの志を以て、先學の驥尾に附し、かくの如き拙文を卷末に捧げる次第である。

一　はしがき

德川時代の學者政治家にして、熊澤蕃山ほど多くの人々に知聞されて居る人は少い。併し又蕃山ほどその本體の知られて居ない人も少いであらう。蓋し、幕政初期に於ては、文運興隆し、諸制創設せられ、學者政治家輩出したとはいへ、尙ほ新舊必しも調和せず、文物の發達は未だ熟せざるものがあつた。蕃山の學問も今日の人々より見れば足らざる所少しとしないであらうが、當時としては爲政者學者中群を拔いて居たのみならず、その行文

は極めて卑近通俗、然かも激情的であつて、文運發達の途上、好學の傾向の著しかつた當時の人々にアツピールしたこと、及び時代が頗る遼遠にして事實の眞相が明確でないことは、蕃山が多くの人々に知られながら、然かもその本體が明かでない理由である。

言ふ迄もなく、德川時代の學問は支那にその源流を發して居る。當時の學問は卽ち修身濟家治國平天下を旨とする倫理的政治學であり、然かも朱子學を正統學派としたのである。朱子學が德川幕政に於ける正統學派となつたについては、多くの議論の存する所であるが、朱子學的倫理觀政治觀は、德川の封建制度と一脈通ずる所があり、封建制存立の辯護に役立ちうるとしたからであらう。蓋し支那流の學問、特に朱子學は心を主とし、政治の道德化を論ずるものであり、又社會生活に對しては極めて消極的、守舊的、階級的、遁世的見解を有したからである。從て又物質生活、經濟活動につきては極めて無關心の態度をとつて居る。經濟なるものは道德政治の中に容攝せられ、獨立して學問の研究對象となり得なかつた。故に德川時代の學者の經濟論なるものは殆どその道德論、政治論中に論ぜられたる斷片的思想にすぎないのであつて、纏つた體系をなすものは極めて少く、體系をなさない迄も特に經濟問題を獨立せしめて論究して居るものは少い。

熊澤蕃山は朱子學徒に非ずして陽明學派に屬する人である。當時として一種の異端學者であつた。その根本思想、行論ともに他の學者と著しく異つて居たとはいへ、その經濟論は道德論、政治論と必しも明確に分離して居るとはいへぬ。只、彼は學問の爲めの學問をしようとしなかつた。空理空論を好まなかつた。經濟生活を社會生活の重要部分と考へ、多分に唯物思想を抱懷し、事物の變遷流轉を天地の眞理と考へたものゝ如くである。故に

彼は時、處位に應じて實踐躬行すべきことを旨とした。彼の議論は常に時處位に應じて論述したものであつて、經濟論、政治論、宗教論といふが如くに系統的に論じて居るわけではない。隨時隨處に主義主張が述べられ、同一の議論が同一の書中に繰り返へされてゐる場合もあり、又甚しきは前後矛盾せる場合もある。併し決して時處位を忘れては居ない。時處位を超越した抽象論は極めて少い。一定の議論は必ずや何等かの具體的事實に立脚して居る。故に彼の所論の本旨を理解せんとすれば、所論の背後に存する事實を知悉しておくの必要がある。私は蕃山の政治、經濟、宗教に關する見解を紹介しようとするのであるが、本稿に於ては一々の事實を說明する事は之を止め彼の議論の前提條件、卽ち彼の所謂時處位、換言すれば當時の社會狀勢及び彼の生活過程を述べ、蕃山の特殊なる議論の由て以て成生せし理由を知るの一助としよう。

二　蕃山の學說の社會的經濟的基礎

イ　內政關係

當時の政治問題としては財政の窮乏對策が最も重要な地位を占めて居た。財政の窮乏は啻に武士階級の生活問題たるのみならず、延いて農民の生活問題であつた。故に蕃山は財政窮乏の事實とその原因の論究に力を致した。又政治組織につきても、その社會の實相に卽せざるもの、或は社會困窮の原因と看做さるゝが如きものゝ檢討を試みた。例へば參覲交代の制度、俸祿の世襲制、兵農分離に由る武士の城下生活等は蕃山の注目を惹いた重大問題であつた。又德川氏がその勢力確立の爲めに行つた諸大名の國除減封轉封による浪人の增加は、當時の社會問題としては容易ならぬものであり、その向背は封建制度の動搖を來すの虞があつた。蕃山が

浪人救濟問題を屢々論述してゐるのも之が爲めである。更に公武の關係は、德川幕政の遂行上重大なる關係を有し、且つ蕃山は公家の人々と多くの親交があつたので、當時の學者に比し最も多くこの問題に關心を有したものゝ如くである。

ロ　宗教問題　キリシタンは既に嚴禁されて居たが、熱烈なる信仰は容易に之を撲滅する事が出來ず、遂に寛永十四年には島原の亂となり、現に蕃山の實父野尻一利はこの亂に出陣して負傷したほどであるから、蕃山にとつてはキリシタンが腦裏より離れなかつたのは當然である。併し蕃山はキリシタンが盛に弘通し、撲滅し得ないのは、日本の佛教佛徒の微力にして、その弊害の大なるが故であるとし、キリシタンを征伐する前に先づ佛徒を懲懲すべしと考へた。蓋し當時は佛徒の增加著しく、寺院の失費甚大なりしのみならず、無知の民衆は甚しく迷惑されたからである。而して佛徒の增加したる所以は、身分階級の固定により、武士階級といへども下級武士が榮達する事は極めて困難にして、況してや百姓町人が立身出世する事は殆ど不可能であつた。唯々佛門に入れば階級を超越し、武士の上位に立つ事も出來、生活も亦安穩であつたから、才幹のあるものは勿論、他に生活の途なき者迄も佛門に入るものが增加したのである。日本全體を通じて幾何の僧侶、寺院が存在したかは不明であるが、岡山藩が寛文七年に幕府に報告したる數字によれば、寺院數一千四十四ケ寺、僧侶一千九百五十七人の多きに達して居るから、他は推して知る事が出來よう。蕃山が諸論著中到る處に寺院、僧侶問題を論じて居るのは右の如き事情に因るものである。

ハ　經濟問題　當時の爲政家學者を惱ました經濟問題は貨幣經濟の普及に之に伴ふ社會的、經濟的弊害に關

してゞある。貨幣制度の確立は德川家康の宿願であつて、天下の統一は一に純正なる貨幣本位を確立する事にありとし、夙にこの方面に力をつくした事は、史家の等しく認むる所である。幕政初期に於ける健實なる貨幣制度は、貨幣の流通を圓滑ならしめ、貨幣經濟は津々浦々に普及した。併し貨幣經濟の普及は米遣の經濟を主體とする封建制度と相容れざるものがあつた。町人勢力の興隆となつて、武士は町人より貨幣の融通をうけざるを得なくなり、武士の唯一の收入たる米の市價が下落して、町人の取扱ふ商品は高直となり、武士の財政窮乏に拍車をかけた。町人の金融資本力の增大は、武士の權力を逆用して賣買獨占權を獲得せんとし、又武士も町人に依存して專賣類似の仕法を設けて貨幣收入の增加に力むるに至つた。更に貨幣經濟の普及は交換經濟の發達を促し、自給自足の生活が破れ、各地の特殊產物が容易に手に入るに至りしを以て、生活の向上、奢侈の流行となつた。故に蕃山は貨幣問題につきては最も大なる關心を有し、後に述ぶるが如く、當時としては注目に値ひする貨幣論、市場論を唱道したのである。

二　天災地變

熊澤蕃山ほど山川藪澤のことを重じた學者は少い。山川藪澤の涵養は殆ど彼の信仰ともいつてよい位である。林政と治水とを以て治國平天下の要諦と考へた。故に蕃山は林政と治水に關し反覆してその主張を高調して居る。何故に蕃山が山川藪澤の事につきて過敏となつたかといふに、それは當時に於ける水旱の災害が頻繁且つ激甚であつたからである。幕政開始以來蕃山の歿する迄は、頗る天災の多かつた時代であつて、水災と旱害とは殆ど連年交互に至り、然かも一年の內數回に亙りて水害の至りしことも少くない。而して戰國以來山川の荒廢甚しく、又治水の方策、農耕の技術未だ幼稚であつたために、水旱一度至ればその慘害の度は到底今

人の想像だも及ばないものであつた。水旱によつて直接に人畜の死傷するもの頗る多きのみならず、稔秋に至つて五穀全く實らずして遂に飢饉の襲來となり、餓殍路傍に横るの慘を出現する事屢々であつた。之は軈て又武士の財政收入を減少せしむると共に、その救濟の爲めに多大の經費を支出する事となるが故に、財政の窮乏の原因となつた。幕政初期に於て武士の財政が窮乏したのは種々の原因あらんも、天災地變による消極的積極的の財政收入の減少は最も重大なる原因を成すものといはねばならぬ。而して水旱の災害は主として山川藪澤の荒廢に因るものなるが故に、蕃山は政治と經濟とをこの林政と治水に結びつけて議論したのである。

ホ　海外の事情　キリシタン宗門の嚴禁と共に外國との交渉を絶ち、鎖國を斷行したので、最初の程は鎖國の禁、キリシタンの禁を冒犯したるものゝ處置に關し、外交上の紛爭はあつたが、結局諸外國は泣ね入りとなつた。併し幕府は勿論、學者政治家などは常にこの外交の危機を懸念してゐたのであつて、武備を整頓し兵食の準備をなし、民力の涵養を計り、一旦緩急ある場合に處すべき方策は當時の識者皆之を論じてゐることによつて明かである。蕃山の武備論もかゝる事情の下に考察されたものであつて、特に蕃山は清國が起つて明國を亡ぼしたので、清國が勢に乘じて我國に寇するかも知れぬと危惧し、北狄の備と稱して屢々その防備の事を論じてゐる。蓋し鄭芝龍、鄭成功等明の遺臣が我國に援兵を乞ひ、又我國に亡命して歸化せるものも少くなかつたから、かゝる問題を憂ひたのも無理からぬ事である。

三　熊澤蕃山の事歴

熊澤蕃山の諱は伯繼、字は了介（良介、了芥、了海とも稱す）小字を次郎八、後助右衛門と改めた。號を息游軒と稱した。蕃山もその號の如くであるが、實は然らず。彼が致仕の後、その采邑たる備前國和氣郡寺口村を改め蕃山と名け、自ら蕃山了介と稱したので、いつの間に蕃山が號として傳唱せらるゝに至つたのである。故に嚴密にいへば熊澤蕃山といふは姓を重複せるものといはねばならぬが、今となりては熊澤蕃山が天下に通じてゐるのであるから、敢えて訂正するの必要もない。蕃山の本姓は野尻氏にして、その父は加藤嘉明の臣野尻藤兵衛一利である。野尻藤兵衛は尾張の人であるが、後京都に寓居した。蕃山は卽ち父が京都に假寓の間、元和五年を以て、五條に生れた。山崎闇齋に後るゝ事一年、木下順庵に先つこと二年、藤原惺窩の歿する年を以て生れたわけである。故ありて外大父熊澤半右衛門守久に養はれてその嗣となり、熊澤の姓を冒す。守久はその父の死後漂泊流轉し、或は柴田勝家に、或は福島正則に、或は水戸の威公に事へたといふ。蕃山の實父野尻一利は鍋島氏に屬して島原の亂に參加して銃丸に中て負傷した。後岡山に來り住し、更に轉々したが、終に延寶八年に岡山に於て卒去した。

寛永十一年、蕃山が十六歳の時、京都所司代板倉周防守の推擧に依て、初めて備前に來り仕へた。蕃山の才智衆に優るゝあるを以て、芳烈公光政は漸く彼を重用せんとした。然るに蕃山自ら思へらく、文武の道を學ばずして進むは士の尊ぶ所に非ずと、乃ち岡山を去て近江國桐原に隱れ、ひそかに武を練り、學を修めた。時に江西に中江藤樹あり、學德備はりて四方より來り學ぶ者多し。蕃山が二十三歳の秋八月、小川村に藤樹先生を訪ひ相見えん事を求む。容されずして空しく歸へる。冬十一月再び往きて乞ふこと頻りである。藤樹先生終に之を聽して

面接したが、父母を國において孝養をつくさずして、學問をなすの不可なる所以を說かれ、終に家を擧げて江州に移り、翌年七月復た小川村に赴きて藤樹先生を訪ひ、仔細を告げたので、藤樹先生は蕃山の心意を嘉みして學を講じ、道を敎へた。蕃山は同年九月より翌年四月迄小川村に滯留して孝經、大學、中庸を學んだ。父一利は仕を求めて江戸に赴いたので、弟妹五人と共に江東に居を卜して母に孝養をつくした。當時蕃山の家貧にして洗ふが如く、江州賤民の食する所のゆりこ雜炊を食し、魚肉酒茶を喫することなく、淸水紙子などにて寒を防ぎ、然かも學修に餘念なく、刻苦研鑽四年に及ぶ。この間、王陽明の書を讀み良知の心法を體得した。芳烈公はその後の行狀を聞知し、京極主膳を介して、岡山に來り仕へん事を慫慂した。茲に於て蕃山は正保二年再び備前に來る。蕃山岡山を去つて八年、二十七歲の時であつた。

芳烈公は蕃山が王佐の才あるを認め、深く之を信認して國事を問ふ。蕃山累進して大夫の列に上り、三千石を食む。その采邑は和氣郡八塔寺村である。之は備作播の三國に界する山地である。蕃山敢えてこの地を受けたと傳へらる。蓋し蕃山はこの地に彼多年の主張たる農兵制度を實試せんとしたからである。乃ち蕃山はこの地方の田畑を開墾し、士數十人を土着せしめ、屯田農法を試む。この頃助右衞門と改名した。三十一歲の時、烈公に扈從して江戸に赴く。名聲嘖々、慕ふて道を聞くもの多く。大小の諸侯は禮を以て蕃山を迎ふ。

承應三年備前の國內未曾有の大洪水あり、人畜の死傷頗る多く、田野の荒廢するもの激甚を極めた。翌明曆元年には飢饉の襲來となり、餓死に頻するもの九萬人の多きに達した。蕃山は芳烈公に上申し、倉廩を開きて迅速に糧食の配給を斷行し、以て窮民の救濟に力めた。人民に慈父の如く尊崇されてゐた芳烈公は、蕃山のこの獻策

によつて窮民を賑恤したゝめに、益〻その仁政を謳はるゝに至つた。蕃山はこの慘害の經驗によつて林政治水策の必要なる所以を覺り、種々の獻策をなし、有能の吏に林政治水の術を敎へ、田畑の檢地、租法の改正をなさしめんとした。かくして蕃山は芳烈公の信認を受くる事いよ〳〵厚く、又領內人民の敬慕益〻深きを致した。併し乍ら共に政治に參加するものゝ中には、蕃山の榮達を心よしとしないもの少くなかつたらしい。時恰も蕃山が藩士の減俸、世襲制の改正等を主張せしとの風說あり、藩士は事の容易ならざるを以て、蕃山排斥の聲が所々にあつたらしい。又佛徒を痛く攻擊したので、僧侶も亦蕃山排斥の策動を企てたらしい。その地位に沾淡たる蕃山は、周圍の空氣の穩かならざるを見て、下野の志を催したものゝ如くである。偶々明曆二年芳烈公に從ひて和氣郡に狩りし、過ちて馬より墜ち右の手足を傷く。依て致仕を乞ふ。初めは聽許なれなかつたが、再三の要請であつたので終に許され、その采邑和氣郡寺口邑を改めて蕃山と稱し、之に隱遁した。時に蕃山三十九歲、明曆三年八月のことであつた。

蕃山の政治的生活はかくして終つた。彼は更に學者としての新生涯に入つたのである。彼が眞に自發的に新生涯に入つたのか、將た又その隱遁が外部の權力の壓迫に由るかは世上諸說紛々として明かではない。併し彼は之を轉機として思想上にも著しく變化し、議論稍激越の度を加へ、社會を皮肉に觀察するの傾向を生じたる點より察するに、彼の政治よりの隱遁は心中必しも快しとしなかつたことは想像に難くない。又彼が如何に見えざる手によつて壓迫せられ、世の有爲轉變を卿つたであらうかは、京師に上つて以來、轉々としてその居を遷さゞるを得なかつた事實によつて覗ふことが出來る。

萬治二年備前を去て京師に赴き之に假寓す。蕃山村に閑居せし年月は明かでない。―一說には明暦六年とあるも、この年は彼が致仕した年であるから、閑居數月を出でずして去るが如きことは考へられない。――蕃山京師に入るや雅樂國典の修學に力め、敢えて世事を談じようとしなかつたが、彼の非凡の才幹と人格とは公卿の尊信を集め、その交友甚だ深きものがあつた。元來蕃山が備前を辭去せざるを得なかつた一因は一部人士の忌諱にあつた。その蕃山が京師に於て有力なる公卿と日夜交渉する事は京都所司代の注意する所となるは當然である。偶々讒人あり、所司代牧野佐渡守親成に告ぐるに「了介が器量世にならぶ者なし、天下の列侯慕ふ事久し、今浪人として堂上に出入す、天朝の公卿亦之を慕ひて送迎絶ゆることなし。事爰に至らば恐らくは事あらん」といふ。牧野氏之を聞いて蕃山の周圍を監視するに至つたので、蕃山は累の身に及ばん事を虞れ、京師を去て大和吉野山の山中に隱る。寛文六年の事である。蕃山去るにのぞんで述懷して、「彼れ暫く勢を得て虛說を造り、あだをなすは彼の惡なり、予が心に於て別に他の事なし、是れ予が不德にて道に入ること未だ深からず、道理の淺き故に、世間の人に能く合ひがたく應接に預るなるべし、され共予が志す所は然らず、全く當世の名利を求むるにあらざれば百歲の後の名も望みなく候へども、當世の名は利に近く、百歲の後の名も譽るもの、毀るもの、共になくなり、虛說造言は跡なく消えて、仁義忠信の誠なくては留り申さず、一旦讒に逢ひ、難に嬰り、惡名を蒙るとても浮べる雲の如くなるものなれば何とも存ぜず、當時の榮譽はやがて分り申すべし」と述べ、又芳野山にて、

よしやよし吉野の山の山守となりてこそ知れ花の心を

と詠つてゐる。その心情切々察するに餘りある。居ること一年にして復た山城國鹿背山に移住し、交友を斷つて

蟄居した。明石侯松平日向守信之蕃山を尊信すること厚かつたので、寛文九年更に居を明石に移し大山寺の傍に寓す。この年備前岡山に藩校の開設せらるゝあり、蕃山招かれてその釋奠の式に列した。蕃山岡山を去つて十有一年、蕃山の後を承けて政治の樞機に參畫せるものは津田永忠であつた。津田永忠は蕃山と年二十を異にすれども事毎に合はず、永忠の積極政策は蕃山多年の主張を覆へしたものが少くなかつた。昔時蕃山の權勢並ぶものなかりし岡山に彼は流轉の身を以て見えたのである。熱血兒蕃山は感慨無量のものがあつたに違ない。

浮萍が一度その細き莖を斷てば止めどもなく流れ漂ふものである。蕃山は復たもその居を轉じなければならなかつた。延寶七年松平日向守は、大和郡山に轉封を命ぜられた。蕃山之に伴ふて矢田山に居る。更に貞享四年八月、日向守は下總古河に移る。蕃山亦之に從て行く。この時已に六十九歲の高齡であつた。蕃山が下總古河に赴いたのは將軍綱吉が彼を親しく引見せんと欲したので、その隨行を命令したのだと傳へらる。蕃山はその年十月「封事」を幕府に上つた。その內容が如何なるものであつたかは明かでないが、蕃山の門下の一人、北小路俊光の日記抄に、「感信多益不少、當時治世の要政也。目六四十箇條程あり、凡知之不及所也。天下の大寶といへども人不知事殘念也」と述べてゐる。併し相當に激越なもので、時勢と相容れず上意に忤ふたものである事は、封事を取り次いだとの故を以て大目付などが免職された事實によつても想像に難くない。されば蕃山が禁錮されたのは當然である。幽囚せらるゝ事四年の久しきに及んだが、然かも面色更に憂ふる所なく、時勢を問ふ者あれば默して答へず、只笙とりて之を吹き、琵琶をとつて之を彈ずるのみ。遂に元祿四年秋八月十七日病を以て歿す。時に年七十有三。松平日向守は親戚門人を會し、儒禮を以て古河の大堤村鮭延寺に葬る。

右に述べたる蕃山の事歴によつて大體その人と爲りを知りうるであらうが、蕃山が貧困の中に身を起し、須臾にして立身榮達し、更に又漂泊流轉の身となりて後半生を不遇に終りし迂餘曲折の生涯は、蓋し蕃山の人物風格に因る所が少くないと思ふ。故に蕃山の風格を最も顯著に見はす二三の事どもを述べよう。

蕃山は容貌甚だ溫和、婦女子の如く、顏色うるはしく聲ににほひがあり、家人奴婢に對しても未だかつて畏慍の色を見せたことがないといふ。併し蕃山は非常に意志の强固な人であり、個人としては溫和であつた蕃山は、社會人として重大問題を論ずる場合には侃々諤々、一歩を退かないといふ强さをもつて居た。所謂外柔內剛の人であつた。彼の議論は當時としては矯激な點もあつたであらうが、多くの人々の反感を買ひ、當局の忌諱にふれるに至つたのは、外見婦女子の如く然かも議論が强烈であつた事に禍ひされてゐると思ふ。蕃山が如何に意思の强かつた人であるかは、彼が青年の頃に心身を鍛練する爲めに力めた日常生活を見れば明かである。卽ち蕃山は集義外書削簡の二に次の如く述懷してゐる。

「愚拙十六七ばかりの時、すでにふとりなんとせしに、他人のふとりて進退不自由を見て存候は、かく身重くて武士の達者は成がたからん、いかにもしてふとらぬようにと思ひ立、それより帶をときて寢ず、美味を食はず、酒をのまず、男女の人道を絶つこと十年なりき。江戸づめにて山野のつとめならぬ所にては、鎗をつかひ太刀をならひとのゐ所にも、ねつゞらの中に木刀と草履を入れ、人しづまりたる後に、廣庭の人氣なき所に出で、闇にひとり兵法をつかひ、火事の時にも見ぐるしからじと、人遠き屋の上をかけり候へば、まれに見付たる者は天狗也いざなはんと申たるげに候。是は二十より內の事にてあまりに過たるにて候。其以後も鷹をもた

ねば夏の暑氣にも日中に鐵砲をもち野に出で雲雀をうち、霜月極月の雪霜を分て山中に入り候へども、夜衣蒲團持たせたる事なし。うす棉のはだ衣の上に木棉袷かたねたるばかりにて、挾箱一つ持せたるも、半は硯紙書物にて小袖二つばかり入たるまでにて、民の家のあばちなるに行かゝりに泊候き、其外のつとめはくはしく申に及ばず候、三十七八歳迄かくの如く勉め候故に終にふとり申さず候」

蕃山の如き攝生は到底薄志弱行の徒のなし能はざる所である。蕃山は右の如く溫和であり意思が強固であつたゝめ人に接して又頗る謙遜であつたが、然かも見る者は蕃山に劍難の相あることを感じたといふ。先哲叢談卷三に次の如く記されて居る。

「嘗て某侯に至り入るに及で一士人威儀特に秀で骨體の非常なるを見、相與に目を張り、注視することしばらくす、遂に一言を交へず。侯を見て曰く、余一士を見る、知らず、仕官乎、將た處士か。侯曰く、渠吾が爲めに兵書を講ずる處士由井民部助なる者也。蕃山色を正して曰く、余其の貌を熟視し以て其の意を察す。君復た彼か如の士を近くる勿れと。他日正雪亦來りて侯を見て曰く、前日退朝の比、某衣某形の人を見る、未だ知らず其の誰たるを、侯曰く渠れ吾に說くに經書を以てす、岡山の臣熊澤次郎八なる者也。正雪色を正して曰く、余其の貌を熟視し以てその意を察す。君復た彼が如きの士を近くる勿れと」

右の說は果して有りし事か否か疑問であるが、蕃山が由井正雪と同じく、心中何等か期する所あり、一癖も二癖もあつた人物に違ひない。又蕃山は頗る高慢の士であつたともいはれて居る。これも蕃山の身に禍ひした一因である。例へば、藤樹先生の敎を受けんとして再三門を叩いておき乍ら、後に著はしたる書中には敢えて藤樹先

生と呼ばず、中江氏と稱し、その學風を江西の學と呼び、未熟の學なりと冷笑せるが如き場合少くない。故に藤樹同門の士西川季格はその著集義和書顯非に於て、蕃山を非難して狼疾の人といひ、「高滿至極なり、高滿甚しき故に我分量を知らず、恥づべきの至りなり」と指彈して居る。併し他面に於て、大江俊光の如き蕃山に親炙せしものは、「入德學術之示、生前之大幸、多益多恩。不淺義也、日本之大賢君子と可謂人也」といひ、蕃山は入學の工夫をこらして修養に之れ力め、その子に對しても高慢の心あるべからざるを說いて居る。毀譽何れが正しきか考へ及ばざる所である。惟ふに蕃山は二の相反馳せる性格を有したのではあるまいが、例へば、佛敎を甚しく排擊しておきながら、僧侶と親交のあつたものが少くない、又僧侶にして蕃山を崇拜せしものが多々あつた。深草の日蓮僧元政の如きは當時道心堅固なるを以て名高かつたのであるが、蕃山と元政とは誠に深き交りの間柄であつた。理を戰はすが人をにくむことの出來なかつた人と思はれる。さればこそ、蕃山が浪人として京師に在る間、當面注視の的となる迄に貴顯の士が出入したのである。とかく問題を起し易い人であり、人格の上に多少の論議の餘地あるにしても、當時の一大人傑であつたことは何人も疑ふことは出來ない。鼻柱の强きことに於ては蕃山を凌ぐ程の荻生徂徠すら、「熊澤集書不佞未見其書、嘗聞其人太聰明、蓋百年來儒者巨擘、人材則蕃山、學問則仁齋、餘子碌々未足數也」と謙遜し、又「伊藤仁齋道德、熊澤了介英才、與余之學術合而爲一、則可謂聖人矣」といつて居る。永富獨嘯庵は「偃武以來豪傑之士四人、山鹿素行、熊澤了介、伊藤仁齋、物徂徠」といひ、服部南郭は「予讀熊澤了介經濟說、足踏其地、口論其政、事々確說、不似他人之空言矣」と稱揚して居る。その他太宰春台、湯淺常山、藤田幽谷等はその政治經濟の學につきては大に影響を受くる所あり、何れも蕃山の人才を稱

揚して居る。亦以て蕃山が如何に不世出の人傑であつたかを知るに足らん。

四　結　び

以上は極めて簡單に蕃山の事歷を述べ、且つ彼の所說が如何なる現實的基礎に立つかを說明したにすぎない。蕃山は最初の間は頗る花々しき活動をなしたるに反し、晩年は極めてみぢめな生活に沈淪して、その主張は省みられず、實行せられたものは少いけれども、併し彼の後に出でたる政治家學者の思想に影響したる點は誠に著しきものがある。彼の學說は必しも系統的にまとめ上げられたものではないにしても、當時としては群を拔くものであり、極端にいへば、彼以後に生れた學者の議論特に經濟論政治論は、蕃山の所說の燒き直ほしであり、その敷衍であるとも考へらるゝ。本稿に於ては蕃山が主として如何なる問題を論議したかの輪廓を述べたに止る。その如何なる論據によれるか、又如何なる思想を展開せるかは、他の機會に稿を更めて詳說する豫定である。又一々の出典も紙面の都合にて全部を呈示する事を避けた。